健康文化　40 号
2005 年 9 月発行

玉木先生の想い出

今井田　二三子

療養生活の後、久し振りに受けた講義が玉木先生の放射線学であったような気がします。教壇に立たれた先生は居並ぶ女子学生を見廻され眼鏡越しの目を丸くされてホーッといった表情をされました。それからもこの表情は時々お見受けすることがあり、私達が意外な質問をしたり、意外な答えをしたときにもされたような気がします。目を丸くされたあと、瞬時間をおいて丁寧な説明をいただいたように思います。その表情の間に先生は学生の思考過程を推考されていたのかもしれません。その後、先生はアメリカへ行かれたため講義を受けたのは短い期間でしたが、私達学生に応じたシンプルで明快な講義と、学究的な雰囲気に私達はひきつけられ「卒業後は、玉木先生の教室に入ろうかしら」と言った人もありましたが、それを実現したのは本財団元理事長の林　文子さん（故人）一人でした。

ある時、先生は講義の前に黒板に山の絵を画かれ、懐かしむような表情でそれを眺めて「山はいヽですネ」とポツリと言われました。学問を愛されるように山を愛されるロマンチックな一面が感じられ、単位不足で卒業も危ぶまれている我が身を忘れて、私もできれば先生の下で放射線の話、山の話もお聴きしたいなどと心の奥で思ったこともありました。私の処に北アルプスの写真集がありますのはこの時の先生の言葉に曳かれたためかもしれません。また或る時、これも講義の始めに嬉しそうな表情で「私事ですけれど、男の子が生まれました、あの美しい長良川の清流を思い“長良”と名付けました」学究の先生の人間味あふれる一面とでも申しましょうか、その一言で先生と私達の距離がとたんに縮まった気がしました。

内科に入局してどれほど経過した頃でしょうか、先生はアメリカからお帰りになり、今から思いますと心血管造影を始めておられたのだと思います、何かの用件で放射線科へ行きますと、折しも検査の最中ですと「いいですかDさん、ハイ息をとめて、いいですか、もう一度息をとめて」と先生のお声が隣室まで

響いておりました。放射線科の先生、技師の方々が一体となりその緊迫した空気は隣室でもひしひしと感じられました。その後、先生は長崎大学に移られ、林さんも研究を続けるため先生の下に移ることになりました。

更に何年かが経過して、林さんが名大放射線科の人になってからのことでした、或る日、「玉木先生が御来岐されるから出てこれないか」と誘われたことがあり、予備知識なく出掛けた私は当然のことながら出席されているのが顔見知りと言っても放射線関係の方々ばかりで戸惑って隅の方で小さくなっていました。その時先生が「H君の文献がイギリスの権威ある放射線学雑誌〇〇に参考文献として出ていたので早速H君に知らせました」と嬉しそうにおっしゃっていましたのをお聞きし、教室の方々を思われる先生のお心に感動し隅の方から次第に話の輪の中に入り込んでいった気がします。そのH先生も、もとは外科の先生であったのが玉木先生の御在職中は放射線科の先生であったように思います。会がお開きになり玄関を出たところで林さんが何か資料を取り出して玉木先生と話を始めました、それは玄関先の立ち話としては長すぎる感じがしましたが、お二人には時間の観念など頭の中から消えている様子で、その横姿を少し離れたところから眺め、この師ありてこの弟子ありと羨ましく思いました。

学問を愛され、自然を愛され、そして人を愛された先生の御逝去は、限りなく淋しさを感じますが、目を丸くされてホーッといったお顔、心血管造影検査の時の「Dさんいゝですか、ハイ息をとめてッ」そのお声の響きは昨日のことように目に浮かび、耳の奥に残っています。

（内科医）